

誘殺虫数は年により多少の変動はあるが、概して年ごとに減少の傾向を示しているのに対し、ヨコバイ類（ヒシモンヨコバイ、ヒシモンモドキ）は増加の傾向を示しており、気象条件や栽培法などを含めた環境条件について検討中である。

第1表 つづき

種 類	項 目	誘 殺 期 間		誘 殺 虫 数		性 比 (♂/♀)		50%飛来日までの 累積平均温度*	
		第1世代	第2世代	第1世代	第2世代	第1世代	第2世代	第1世代	第2世代
ドクガ科	年次								
	’68	6.19~7.30	8.18~9.28	59	335	5.5	6.2	1,766.5	2,995.2
	’69	6.18~7.22	8.8~9.25	7	207	1.3	6.9	1,937.4	3,012.0
	’70	6.23~8.10	8.25~9.24	28	70	1.0	2.6	1,972.0	3,046.3
モンシロドクガ	’71	6.22~7.29	8.23~9.27	21	114	1.1	3.7	1,886.0	3,049.2
ヨコバイ科	’69	—	8.12~9.28	—	243	—	5.5	—	3,135.4
	’70	6.12~7.28	8.2~9.29	109	202	6.2	2.9	1,655.4	2,585.4
	’71	7.4~8.16	8.20~9.26	404	115	3.2	15.4	1,804.5	2,772.2
ヒシモンモドキ	’70	7.1~7.31	8.14~9.23	55	74	4.5	6.4	1,376.3	2,931.0
	’71	6.28~7.18	8.12~9.26	20	326	3.0	22.2	1,708.0	3,209.5
エダシャク科	’68	5.18~7.12	7.16~9.26	156	388	13.1	13.3	1,044.2	2,412.9
	’69	5.17~7.12	7.25~9.16	67	240	21.3	16.1	1,267.2	2,485.8
	’70	5.20~7.21	7.26~9.9	76	138	7.4	26.6	1,231.3	2,345.0
	’71	6.5~7.1	7.12~9.7	16	192	15.0	9.1	1,113.1	2,504.2
シマトビキエダシャク	’68	6.12~7.11	8.5~9.26	45	213	6.5	16.7	1,211.0	2,695.4
	’69	6.18~7.1	8.10~9.7	24	99	11.0	48.5	1,246.6	2,747.5
	’70	6.11~7.11	8.12~9.6	24	110	7.0	**	1,253.4	2,770.5
	’71	6.13~7.8	8.10~9.23	8	66	**	65.0	1,287.3	2,744.6
ヤガ科	’70	6.2~7.9	8.4~10.11	451	964	8.6	5.3	1,048.5	3,046.3
	’71	5.10~7.10	8.9~10.13	214	1,054	5.4	3.0	958.1	2,974.9
メイガ科	’68	5.30~7.2	8.2~10.6	38	254	3.8	8.9	957.2	3,066.9
	’69	5.29~6.27	8.1~9.25	17	22	16.0	21.0	1,000.8	3,001.2
	’70	5.31~6.21	8.8~9.28	6	6	5.0	5.0	987.3	3,093.4
	’71	6.8~6.22	8.7~9.27	7	41	**	3.1	1,033.1	3,143.0

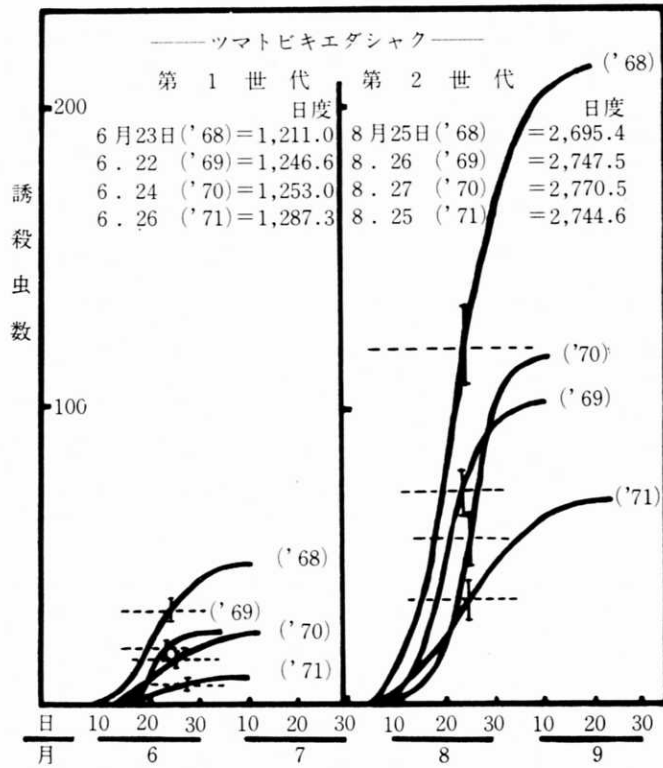
* 1日の平均温度は自記温度記録計による午前9・10・12時，午後2・6・10時の平均値

** 雌の飛来なし

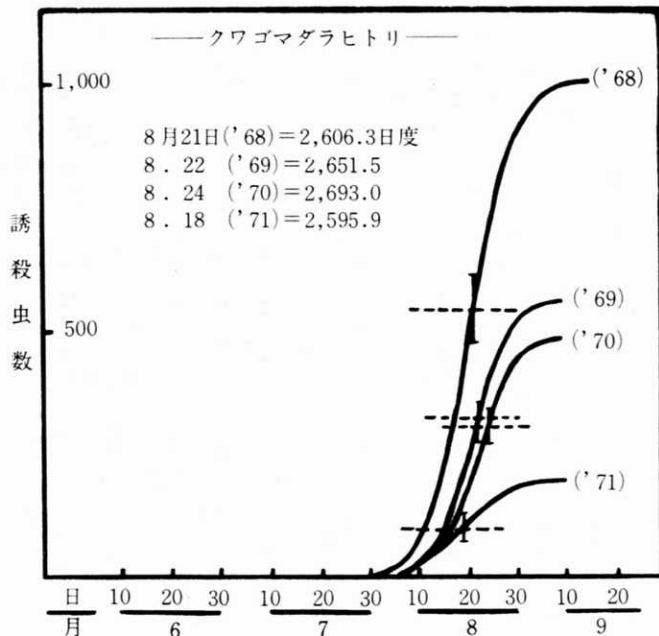
各世代における50%誘殺日の推定の可否について、虫体に対し生理的に有効に作用し始める期日が全く不明であるため、便宜的に4月1日を起算日とした累積平均温度の理論を用いて検討すると、ヒトリガ科、ドクガ科、メイガ科、シャクガ科およびヤガ科昆虫の大方について、発生時期の予測がほぼ可能であるように思われた。とくに、年1回発生する昆虫（クワゴマダラヒトリ等）では、年2回発生するそれらに比較して発生変動が概して小さく、予察は比較的容易であるように思われる。しかし、ヨコバイ類は年間における発生型（誘殺期間、発生盛期など）や発生量の変動が非常に大きく、環境条件（低温、降雨、風など）の強い影響を受けていることが推察され、誘殺灯を利用した

発生時期の予測はかなり困難であろう。

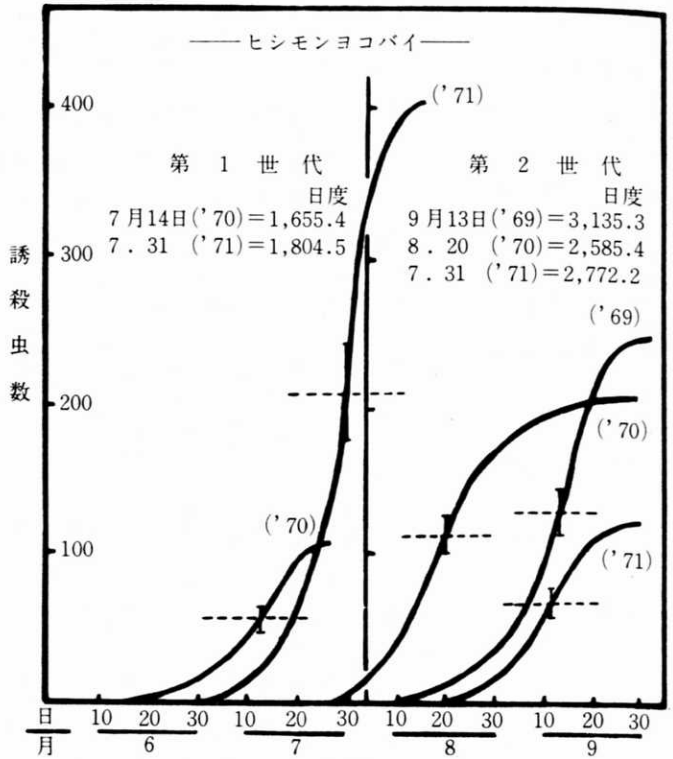
また、誘殺虫の性比は雌の飛来が非常に少ないクワゴマダラヒトリ、ヨモギエダシャク、ツマトビキエダシャクや、かなり多いオビヒトリ、モンシロドクガなどさまざまで、カクモンヒトリ、オビヒトリ、モンシロドクガなどでは第2世代に比べて第1世代における雌の比率が明らかに高い傾向が認められたが、いずれの種においても雄の比率が圧倒的に高く、雌雄の走光性や活動性には大きな差が認められ、雌成虫に対する感応性その他の点から、的確に種の消長を知るためには、予察灯として光源だけに依存しない、より効率的な新しい方法を検討する問題が残されているようである。



第1図A 累積誘殺数と50%飛来日までの累積平均温度



第1図B 累積誘殺数と50%飛来日までの累積平均温度



第1図C 累積誘殺数と50%飛来日までの累積平均温度

4 摘 要

高圧水銀灯を用いて、主要な桑害虫の季節的発生消長を調査した。

1 ヨコバイ科昆虫を除き、大方の昆虫の誘殺数は年々減少の傾向を示した。

2 予察灯による桑害虫(走光性昆虫)の発生時期の予測は、ヨコバイ科昆虫を除き大方の種が可能であると思われる。

3 誘殺虫は大部分が雄で、雌雄間の走光性や活動性には著しい差が認められた。

東北地域におけるクワシロカイガラムシの天敵こん虫について

安田 壮平・森谷 克子

(農林蚕試東北支場)

1 ま え が き

クワシロカイガラムシの天敵利用を中心とした防除新技術の開発に資するため、1971年度は東北地域に生

息する天敵こん虫の発生生態を調べた。その結果、天敵こん虫の種類、生息密度、発生時期等について若干の新知見を得たのでその概要を報告する。